月下雲海航行録

布畑炭焼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下雲海航行録

【Ｎコード】
Ｎ８０７５Ｘ

【作者名】
布畑炭焼

【あらすじ】
月光の下、その船は雲海を行く。行き先は月の向かう先。目的地はハナから存在しない。

1

月夜の雲海(うみ)に浮かぶ一隻の巡洋船は、音を立てず、静かに、月を真上に据えて、悠々と泳いでいた。

その姿は方舟と亀甲を足して二で割ったような、なんとも設計の意匠を理解しがたい奇っ怪な形をしている。おおよそ、現代のデザインセンスの流れを汲んで作られたスマートで合理的な形には見えず、流体力学や船舶、海洋工学を無視した、どうにも、おかしな船である。

「座標を再確認。月の予想進路を出せ」

船が奇っ怪なら、船員も奇っ怪。艦橋で声を上げているのは、妙に蒼白い肌に、ボサボサの黒髪、無精髭を蓄え、誰がどう見ても健康体とは思えぬ男、ただ一人である。食糧庫に紛れ込んだ鼠をはじめとする密航者を除けば、船員はたったの一人。船体の規模からすれば、不気味なほどに人手が足りない。それでも、船に乗っているのはたったの一人。一人なのである。

その男の名は、トモキセ・ドーパミナと云い、この船、セレナ号の船長帽を１４の時に初めて被って以来、殆ど一人で、大海原を巡り廻ってきた。３１年の人生において、樹(おか)の上より、セレナ号の上で過ごしてきた時間の方が遥かに長く、船乗りとしての腕前は、比較対象こそ無いが、絶対的に秀たものを持っていた。

「物資はあとどれくらい持ちそうだ？」

雲海図を広げながら、トモキセは呟く。答える者などいるはずがないが、それは違っていた。テーブルの上の懐中時計――に形さえよく似た得体の知れない発光器――が発光し、符号を用いて答える。どうやらあまり余裕は無いようで、ここいらで少し、補給をしなければならないらしい。

「……進路上に規模の大きな港湾はないか？」

と、トモキセが聞くと、

［ジリキデノケンサクヲモトム］
と、発光器は答える。
「ああ、ああ、わかったよ、俺がやる」
バツが悪そうに、トモキセは雲海図を睨む。会話をしているのは、何も人間相手ではない。もちろん、トモキセが一人で発光器を操って会話をするような寂しい真似などしているわけでもない。
発光器を操っているのは、セレナ号に装備された知能であり、名はそのまま、セレナと云う。トモキセの長く終わりの見えない船旅において、数少ない友人であり、会話相手であり、そして、良き航海士である。揚錨、操舵、何から何まで、大体のことをやってのけるが、接岸離岸に関してはトモキセが手動で行わなければならない。そして人工知能にも関わらず、まるで船長に従わず、つかみどころがどうにも見えない。
行き先は月の向かう場所、目的地などはわからない。セレナの性格は、この船を表しているようであった。
「駄目だ……。雲海図に載ってるような港にゃ遠すぎる。どこか小さな場所でいい、今は補給が優先だ」
［ジリキデノソウサクヲモトム］
「ああ、ああ、そうするよ、気が向いたら、飢え死にする前に助けてくれ」
目頭に指をあて、ため息をひとつ。ようやく拠点となる港へ帰還できると思ったが、今回は妙に月がおかしな軌道を描いたために、計算よりも時間を食ってしまったのだ。
失態だった。月が予測と違う進路をとるのは別段変わったことでもないが、今回は休暇が取れそうなだけあって浮き足立っていたのだ。いざとなれば任務を放棄して直接拠点へ向かうことはできるが、それはあくまで最終手段。面倒を起こしたくはない。
まあ、なんとかなるだろう。頭を抱えていても仕方がない。トモキセが海図を丸め、筒にしまおうとしたときであった。
［１１ジホウコウ　コウゲンタスウ］

セレナが文字通り光明が射したような報告をしたのだ。慌てて艦橋から左前方を望むと、たしかに遠くに灯りが見えた。間違いなく、街の灯りである。一つだけやや高い位置にある灯りは灯台のものであろうか。規模からするに、船が補給を受けることのできる設備は間違いなくありそうだと確信した。

「馬鹿野郎、もっと早く報告しろ」

［キカンノセイメイヲスクッタユウシュウナルコウカイシニオオイニカンシャヲセヨ］

「ああ、ああ、ありがとよ。とーりかーじ、１０度」

［ジリキデノソウダトシャジヲモトム］

「ああ、ああ、飢え死にするところを助けてもらって感謝してる、我が船の優秀なる航海士さんよ」

仕方無しに、船長自ら舵輪の前にたち、船体を回頭。恩を売るとすぐにこうなのだ。

「進路、宜候。距離は？」

［カイズヲサンコウニセヨ］

「ああ、ああ、わかったよ、俺がやる」

奇っ怪な船は、奇っ怪な船員を乗せ、灯りへと向かう。天の中心に月を据えたまま。

2

「進路宜候、両舷微速前進。風は？」
［ゲンザイノシンコウホウコウニヘイコウ　ビフウナリ］
「わかった。このまま接岸する」
　ようやくたどり着いた港は、雲海図に載っていないのが不思議なほどに栄えていた。港の大きさに対して船の数は嫌に少ないが、灯りは港街のそれそのものであり、活気がある。補給には問題ないだろう。
　セレナ号は桟橋へと近付き、そこに横付けする。
「接岸まで５０……４０……３０……。両舷停止、２０……１０、両舷後進微速……停止。錨を下ろしてくれ」
力仕事を船自身に任せ、トモキセはセレナの発光器を持って甲板に出た。久々に嗅ぐ街の臭い。遠くから薪か何かが燃える臭いやら、木の臭いがする。
　樹（おか）に上るのは２６日振りになる。生鮮食品もやっと食べることができる。トモキセにとっては缶詰めや瓶詰め、干し肉などの保存食の方が馴染み深いが、それでも採れたての野菜の歯応えは何にも変えられないのだ。
［ビョウ　カンチン　コウコウニカカワルゼンキカンヲテイシ］
「あいよ、お疲れさん」
　係留ロープを持ち、投げたものを受けとる水夫が来るのを待つ。先ほどセレナが発光信号にて入港を合図したのだが、妙に遅い。伝わっていなかったのだろうか。
「遅いな。桟橋から離れちまうぞ」
［エンポウニスイフラシキジンブツ　タスウ　セッキンチュウ］
「お前も言うのが遅いんだよ」
［ヨウビョウ　ゼンソクコウシン］
「反抗するなよ」

船の態度はどうであれ、桟橋の根元付近からこちらに向かって水夫が近づいてきていた。その数、２０はいるだろうか。変に多すぎる。やがてハッキリと視認できる位置まで近付いたとき、トモキセは気付いた。

「あまり歓迎されてないようだな……」

軍服を着て、手にはマスケット、これは明らかに兵士である。獣人が殆どであるところを見るに、『ストキヴ』の海軍だろうか。投光器によって、甲板のトモキセが照らされる。久々の眩い光に、目だけでなく、頭まで溶けてしまいそうであった。

「貴船の寄港目的を述べよ！撃ちー方用ー意！」

逆光になっていて見えないが、その声は間違いなく水兵の声であった。きっと、数多くの銃口がこちらを向いている事だろう。

「補給だ！物資が底を付いちまってなあ、光が見えたもんだから、ここに寄らせてもらったんだ！」

声を張り上げ、質問に答える。別に恐怖などはない。よくあることである。それにセレナ号には武装はないが強力な切り札がその後ろについているのだ。

「他の船員はどうしている！」

「生憎俺一人だ！」

答えると、水兵たちが途端にざわつく。この規模で、だとか、たった一人で、だとか。当たり前だ、普通はセレナ号程の大きさになれば、船員は少なくとも２０名は必要になる。

「下らない冗談を言うな！ふざけているようでは発砲も辞さない！」

当たり前の反応である。しかし冗談ではないのだから、撃たれる筋合いはない。トモキセは切り札を引いた。

「連合の船って言うのはな、俺みたいなへっぽこ一人でも泳がすことができるようになってんだよ！」

水兵全員に、街まで響くように、大きくハッキリと声をあげた。一瞬の静寂、そして、大きなどよめき。

「お、おい！投光器、国旗を照らせ！」

「国旗は船体後方とマストにある！船名は横にでかでかとセレナって書いてあんだろう！」
水兵たちは慌てふためきながら投光器を操作する。トモキセは光から外れたが、目に光が焼き付いて、まともな視界が取れない。夜目が利くのが長所なのだが、こうなってはどうしようもない。下手に動くこともできずに、その場に座り込んだ。
「国旗視認！三人連合船籍！撃ちー方止め！捧げー銃！」
掌を返したように、途端に敬意を表す水兵たち。軍人ではないが、トモキセも一応敬礼をしておいた。
「先ほどの無礼、謝罪いたす！」
「なに、こっちも軍港とは知らなんだ！ともかく係留させてくれ！ザイルを投げる！」
座ったまま、桟橋に向けて思い切りロープを放る。切り抜けたことには切り抜けたが、軍に囲まれて過ごすこととなると、少々面倒になりそうである。
「係留完了！ようこそ我が港へ！歓迎する！良ければ案内するが！」
「いいや、航海の後始末があるもんでな！暫く後、こちらから挨拶に行く！」
「了解した！担えー銃！」
水兵たちは帰っていく。少なくとも襲われる可能性はないが、軍隊との関わりは精神をすり減らす。出来ればさっさと補給を終わらせ、雲海に出るのが一番よい。
「……セレナ、月の予想進路は」
［ジリキデノヨソクヲモトム］
「目が眩んで何も見えねえんだ、頼む」
［ケイサンカンリョウ　ミッカカンノテイタイノノチ　『ナハルド』ホウメンヘムカウ］
「三日かよ……」
月が動かない以上、セレナ号も離れるわけにはいかない。三日はこ

こに留まることになるようだ。
「まあ、いい。マストしまえ、離艦準備だ」
まだ眩んでいる目をなんとか見開いて、トモキセは艦橋へ戻る。
久々の樹なのだから、野菜やら肉やら酒やら何やら、楽しめるものは楽しんだ方がよいだろう。

3

［グンコウニシテハ　グンカン　イヨウニスクナシ　ショウカイテイ　フタ　ソノタコガタセンテイ　ショウスウ］
「出来立てなんだろ。施設も新しいしな」
［ホキュウブッシニハキタイデキズ］
「なに、俺一人の飯一ヶ月分と、お前が食う極々僅かな油がもらえりゃいい。金を積めば船から抜き取ってでも入れてくれらあ。燃費がよくてつくづく助かってるよ」
つぎはぎだらけでボロボロの船長帽を深く深く被り、首から下げた発光器と会話をしながらトモキセは街へと向かっていた。
　大型の戦艦すら係留できそうな埠頭には、既に２１００時を過ぎた現在も獣人の兵士たちが見張りのために巡回していた。厄介ごとを避けたいがために、できるだけ目を合わせないように歩いていた（これはもちろん軍人に対する若干の恐怖もある。船を降りればただの人なのだから）が、驚くことに、すれ違う兵士がみな真剣に敬礼をトモキセにたいしてしてくれるのだ。もちろん、不規則、不摂生、不健康で、蒼白い顔に眼ばかりギョロギョロしているトモキセが普段どのような扱いを受けるかなどというのは言うまでもなく、今回のような経験は、船長を勤めて１７年、初めてである。
　肘を前に出す海軍式の敬礼をする兵士たち一人ひとりに、左胸に右手を当てる文民の敬礼で返した。
「なんだよいったい……」
［グンジンタチカラノケイイ　シンシニウケルベシ　フナノリニタイスルケイイ　スナワチ　ジョウセンニタイスルケイイニオナジ］
「ああ、ああ、そうだな、お前はすげえよ。浮かれんな」
［ワレ　マンゾク］
　この状況を一番喜んでいるのは誇らしげにツートンツートンと光るセレナのようであった。そのずんぐりとした特異な姿からか、へ

たれの船長と同じく悲惨な扱いを受ける事が多いため、案外鬱憤がたまっていたのかもしれない。何か無性に腹がたったので、トモキセは発光器を小突いておいた。
［ヨセ］
「うるせえ」
その後も、敬礼と、発光器との下らないやり取りをしつつ、光のある方に歩くこと数分、一件の酒場らしき店へとたどり着いた。すりガラスから灯りが漏れ、軍歌と笑い声が内側から聞こえ、表には酔い潰れたのか酒瓶片手に丸くなって寝ている小柄な猫の獣人の姿があった。
「……嫌だなここは。嫌な予感しかしない」
酔った軍人は一番たちの悪い相手だ。本当に関わりたくない。しかし辺りには他に開いている店もなく、おそらくはここに入るしか無いのだろう。
［トッカンセヨ］
「馬鹿野郎、殺す気か」
［ナキガラハテイチョウニアツカイスイソウトス　エイレイヨヤスラカニ　ツケケン　ササゲツツ　チョウジュウウテ］
「俺は軍人じゃねえし、しかも勝手に殺してるんじゃねえか」
などと文句を垂れてはみるものの、それではどうにもならないし、ひとまずはこの店に入らなければならないのだ。覚悟を決めて、トモキセは笑い声のなかに突貫した。
静寂。従業員ばかりが忙しく動いている。テーブル席の方に固まっている酒臭い兵士たちは、トモキセを見ると、途端に酔いが覚めたように真顔で敬礼を始めた。先までの賑やかさが嘘のようである。実際に嘘だったのではないかとも思っていた。
「ああ、ああ、なんだ、そのな、俺は一介の船乗りだからな、お偉いさんでもなし、力抜いてくれ」
そんな切実な願いを伝えながら今日何度目ともわからない敬礼を出し、空いていたカウンター席へと座る。客も店員も全てが獣人であ

ったが、唯一、カウンターにいる店主らしき老人だけは、トモキセと同じ地人であった。
「おや、軍人さん以外がここに来るなんてな。あんた、随分顔色が悪いじゃないか」
他とは違って毛におおわれていない同種族の顔は、どこか安心するものがあった。あまりにもアウェーな環境が、少し心細いところであって、そこに丁度、軍人たちに話が利きそうな地人が一人いたものだから、それは救われた気分になるだろう。
「仕事がら陽に当たらなんだ、年がら年中死人みたいなもんさ」
「そうかい。てっきり船酔いならぬ樹酔(おか)いでもする体質なのかと思ってな。ならばレモンでも添えようと」
「ハハ、確かに揺れがないのは落ち着かないけどな。とりあえずビール、それから、なんでもいいから新鮮なモノを頼む」
「アイ、サー。ゆっくりしとってくれ」
［ケイユヲモトム］
黙らない発光器を胸ポケットへしまう。ゆっくりしろとは言われたものの、兵士たちの視線はいまだこちらに集まっている。敬礼こそ終わったが、その静けさはなにか異様なものであるに他ならない。店員たちも感付いているようで、どこかぎこちない動きが目についた。
情報が早い、というか、統制が取れている、というか。部隊間の連絡網が強固であると言う点については、非常に優れているのだろうが、出来すぎていて逆に不気味さを感じる。視線を悟られないように、船長帽を更に深く被った。
程なくしてジョッキに入ったビールが出てくる。待つことはほとんどなかった。店主には悪いが、ここは長居せずに出た方が良いだろう。主に精神衛生的に。
とは言え、久しぶりの酒である。黄金色の命の水は、何物にも代えがたい。だが、さあまずは一口と、空きっ腹に流し込もうとしたときであった。

「これはこれは、セレナ号の艦長さまではないか」
悪感。いいや当たっている。ほぼ、確実に。４０も半ばの過ぎた獣人の渋く重い声は、疑うまでもなく軍人のものであろう。それを確かめるため振り向いてみると、金色の毛に、鋭い牙と爪、それから琥珀色の目玉。ピンとたった頭頂部の耳と、佐官を示す階級章。威圧十分、眼光だけで人を殺せそうな狐の大獣人(おおおとこ)が、先刻店先で潰れていた猫の兵士を軽く抱えて立っていたのだから、トモキセは脱帽し、ついでに命の危険を覚えずにはいられなかった。見れば他の兵士も敬礼をしている。抱えていた兵士を下ろし、男は敬礼を出しながら、挨拶を始めた。
「遠路はるばる、ようこそ我が港へ。私はストキヴ海軍のキシル・ノルアドレ大佐だ。一時的ではあるが、ここの港長をしている」
「あ、ああ……。セレナ号船長、トモキセ・ドーパミナだ。理解に感謝している」
その図体にしては随分紳士的だ、というのがトモキセの率直な感想であった。偏見であるが、ストキヴ海軍と言えば、荒々しい雲海(うみ)の男たちが多いというのが通説である。しかし、目の前のキシルには、そういった豪快さなどがあまり見られないのだ。このほうがずっと良い。
「部下たちが驚いていたよ。警戒灯もなし、まさかこんな僻地の港、あんな暗い埠頭に船を滑り込ませるなんてな」
「夜目だけは利くんだ。明かりのない航行にゃ慣れっこだよ」
「それは随分羨ましい。そのような部下が私にも欲しいものだ。じいさん、ビールをくれ」
「アイ、大佐(キャプテン)。特急で」
軍服の首もとのフックをはずしながら、笑顔で注文する。店主とは顔馴染みのようである。やもすれば、この大佐、もしくは店主を丸め込めば、スムーズに補給を完了できるかもしれない。
特急という言葉通り、ビールはすぐに運ばれてきた。おそらく特注であるろう巨大なジョッキに並々注がれたものである。

「セレナ号のために乾杯させてくれ」
とのことなので、彼に任せることとした。
「てめえらよく聞けッ！」
豹変。偏見は間違ってはいなかった。立ち上がり、ジョッキを高く掲げた目の前の佐官は、獣（けだもの）に間違いなかった。
「今宵は、あの『三人連合』より客人が来られたッ！各自失礼の無いようにしろッ！だが、なにか難しい事じゃあない。てめえら飲兵衛どもにもできる簡単なことだッ！何故なら客人も海の男。海の男なら海の男らしく――」
悪感。いいや当たっている。ああ、神よ、私にもう少しばかりの幸運と大佐に先ほどまでのジェントリズムを。こうなれば、トモキセも信じているわけでもない神に祈るしかなかった。
「――ひたすらに飲み巻くれぇッ！店にある酒、一滴たりとも残すんじゃねえッ！俺の奢りだッ！」
兵士たちの歓喜の咆哮が響き渡る。恐ろしい。紳士は何処。
「各自、ジョッキを掲げええぇぇいッ！潰れてるやつも叩き起こせええッ！海の男として客人をもてなせッ！かんッ！ぱあああああぁぁぁぁいいッ！！！」
月までも響きそうな声、迫力。獣人たちの叫びは、トモキセの心をどこまでも不安にした。ジョッキを当てる音、勢い余って割れる音、それにも構わず飲む音、かける音。この先を思いやられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8075x/

月下雲海航行録

2011年10月28日03時20分発行